２０２３年３月５日　東日本大震災を覚える礼拝　青戸教会

説教「善なる神を信じる」　高橋克樹牧師
聖書　ヨブ記２章１～１０節、ルカ福音書１０章２５～３７節

日本に暮らす限り、地震とは無縁に生きられません。誰でも知っているように、地球を覆っているいくつかのプレートとプレートとの接触面に、相互に離れて行って地下から溶岩が噴き出して海嶺を作る場合と、一方が他方の下にもぐり込む場合と、相互にずれる場合と、相互に衝突して盛り上がって山脈を作る場合があります。

日本列島が乗っている北米プレートの下に太平洋プレートが沈み込んでいるため、その沈みこみによって起こる歪みが限度を超えると跳ね返って巨大地震を起こしてしまうのです。わいてきますが、キリスト教は天地創造の神が世界を創造したと考えているため、理不尽な自然災害が起こると、何となく、不条理感が湧いてきます。

１７５５年１１月１日に起こったリスボン地震でも、同じような疑念が起こりました。カトリックでは１１月１日が諸聖人の日であることから、当時のキリスト教世界では、そのような祝日になぜ神は大きなリスボン大震災を起こしたのかという疑問に宗教指導者たちは明確に答えることができませんでした。津波による死者１万人に加えて６万人以上の死者が出た大震災で当時の海洋大国であったポルトガルが衰退するきっかけになったとも言われています。

このような自然災害は神の意図したことではないけれども、自然災害に対して神は無力なのではないかという思いが多くの信仰者の心に芽生えて、のちに啓蒙思想が生まれるきっかけになった事件でした。けれども、地震は物理的にプレート同士の摩擦によって起こるわけですから、どうしようも避けられない面があるのです。

東日本大震災から１２年経っても、肉親を失った人々の悲しみと絶望は私たちの胸を締め付けます。津波から逃げながら、親は子を探し、子は親を探し、兄弟姉妹はお互いを探し、ついには自分を犠牲にした人々もいました。これらの人々にとって、富や名誉などは何の役にも立たず、何か大きな仕事を成し遂げたということがあったとしても、それらも何の役にも立たず、ただ肉親と一緒にいたいという思いだけが、危機的な状況の中で究極の目的で、多くの人が行動したということが私たちの心に焼き付けられました。

大震災に遭遇して、家も富も一切を奪われて、人間は本来何も持たない裸の存在であることを突きつけられたと言えます。旧約聖書のヨブは、自分と家族に起こった悲劇がどうして起こったのかについて、自分の罪の結果だという３人の友人たちに反論したのですが、ヨブ記の２章は天上においてサタンの試みがあったということを描いて、人間の理解不能な災害に対して、その原因を描いています。

ヨブは自分に起こった家族の悲劇に対して、非常に有名な言葉である「わたしは裸

で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」（1章21節）と言ったのでした。ヨブは家族が亡くなった知らせを受けて、人間という存在が何も持たない裸の存在であること自覚しているのでした。けれども、そのような無垢なヨブに対してサタンがさらなる試みを与えるというのが、ヨブ記の発端です。

東日本大震災に遭遇して「助けて」と叫ぶ声を聴いて、人は走り寄る行動をとったのですが、そこではだれも、他者を支配しようとしたり、利用しようとしたり、ましてや暴力を振るおうとはしなかった。極限の無一物、裸一貫の人間の姿を見せたのですが、そこには人と人が信頼と愛によって支えあう姿が出現しました。

このことからわかることは、人間にとって生きる意味とは、他者との交わりにあるということでした。生きるということは、他者とかかわっているということから生きているという実感が生まれてくるということです。つまり、他者を愛すること、他者から愛されること、他者を助けること、他者から助けられること、こういう人間のかかわりこそが人間に喜びをもたらすということを明らかにしました。他者という存在は、自由な存在ですから、自分が絶対に支配できない者です。そのような他者から声を掛けられ、手を差し伸べられ、助けられ、愛されるということは、自分自身の力では絶対に獲得できない肯定感が与えられることを教えてくれたと言えます。

それまでの日本は、人間は富や名声や快楽によって、生きることに満足を与えるかのような風潮が支配的だったと言えます。技術文明は人間に富や快楽をもたらすものという大前提があったように思います。けれども、東日本大震災と、その後の被災地支援の様子によって知らされたことは、他者を助けることは人間にとって本来的な人間の姿だということでした。さきほど、ルカ福音書の「善きサマリア人の譬え」を読みましたが、このような事例が人間にとっては稀れであるから、この譬えがイエスによって語られたと理解されがちですが、私たちは東日本大震災で人間の支えあう姿をたくさん見ることになりました。

神は天地を創造されたと同時に人間も創造しました。しかも、人間を自分の意のままに動くロボットとして創造されたのではありませんでした。ボタン一つで自分の命令通りに動くロボットを作ったとしても、愛の相手にはなりえません。愛の相手は根本的に自由な意思をもって神に応答する存在でなければならなかったのです。神は善なる存在として、人間に愛でもって応答する力を与えたのです。そのことが東日本大震災で図らずも知らされたということができると思います。亡くなられた多くの人々の霊が、多くの人間によって示された愛の業によって慰められていると思わされるのです。私たちも神によってこの愛を発揮しる力ｇ与えられていることを感謝したいと思います。